

ソシュールと歴史言語学

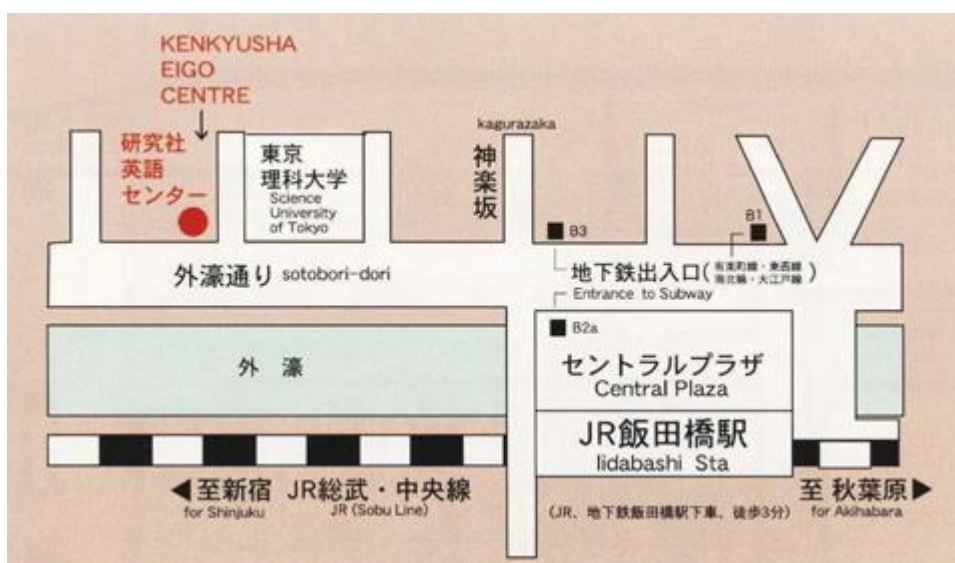
言語の研究にかかわるあらゆる人にとって、フェルディナン・ド・ソシュールの名は特別の響きを帯びています。このたび、日本歴史言語学会が新たに春季公開シンポジウムを開催するにあたり、まずはソシュールを取り上げることになりました。

ソシュールは、歴史的研究一辺倒だった20世紀初頭までの言語学を、『一般言語学講義』によって記述的な方向に導いたのだ。ソシュールこそ現代の言語学の祖である。そんな認識を持つ方も多いことでしょう。しかし、『講義』では記述（ないし共時）的な研究ばかりでなく、歴史（ないし通時）的な研究も同様に詳しく取り扱われています。実際、ソシュールは極めて先端的な歴史言語学の専門家だったのです。

実のところ、ソシュールの研究の全貌をつかむことは容易なことではありません。今回のシンポジウムは、ソシュールの業績の真髓と、その後の進展について詳しく知るためのまたとない機会です。歴史言語学の復権が進む今日、現代言語学の祖ソシュールが歴史言語学に残した足跡を正しく把握することは、各方面の研究のために欠くべからざる基礎となることでしょう。どうぞふるってご参加ください。

記

時 2017年3月19日（日） 13:00～17:00 参加費 無料
於 研究社英語センター（JR、地下鉄 飯田橋駅より徒歩3分）
地下2階 大会議室 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2



主催 日本歴史言語学会 共催 株式会社研究社
お問い合わせは日本歴史言語学会事務局 info@jp-histling.com まで

プログラム

- 13:00 受付開始
- 13:30 開会のごあいさつ 日本歴史言語学会会長・大阪大学教授 神山孝夫
株式会社研究社社長 関戸雅男
- 14:00 基調講演1 ^{クール}『講義』と歴史言語学 名古屋大学教授 町田 健
- 14:30 休憩
- 14:45 基調講演2 ^{アップラウト}母音交替の研究:『覚え書』と^{メモワール}喉音理論 神山孝夫
- 15:15 基調講演3 アクセント史の研究 名古屋大学教授 柳沢民雄
- 15:45 休憩
- 16:00 座談会「ソシユールと歴史言語学」＋質疑応答
パネル: 神山孝夫(司会)、関戸雅男、町田 健、柳沢民雄
- 16:50 閉会のごあいさつ 町田 健
- 17:00 閉会

講師紹介 (五十音順)

^{かみやまたかお}
神山孝夫 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪大学大学院文学研究科教授。専門はヨーロッパ諸語を中心とした歴史言語学と音声学。学位論文でソシユール『覚え書』にはじまる喉音理論と印欧祖語の母音交替を研究。

主要業績:『日欧比較音声学入門』(鳳書房、1995)、マルティネ『「印欧人」のことば誌:比較言語学概説』(ひつじ書房、2003)、国際音声学会編『国際音声記号ガイドブック』(竹林滋氏と共訳)(大修館書店、2003)、『印欧祖語の母音組織:研究史要説と試論』(大学教育出版、2006)、『脱・日本語なまり:英語(+α)実践音声学』(大阪大学出版会、2008)、*Laryngales et schwa indogermanicum*『待兼山論叢』43(大阪大学、2009)、『ロシア語音声概説』(研究社、2012)、「名誉会員の業績に学ぶ:松本克己著『言語学の方法』、『ことばをめぐる諸問題』、『歴史言語学』5(日本歴史言語学会、2016)。

^{まちだけん}
町田 健 東京大学大学院人文系科学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院文学研究科教授。専門はロマンス語史を中心に言語学全般。ソシユールの解説本数点に続き、バイイ・セシユエ編『講義』100周年を迎えた2016年、『新訳 一般言語学講義』を研究社から上梓。

主要業績:『言語学が好きになる本』(研究社出版、1999)、『言語が生まれるとき・死ぬとき』(大修館、2001)、『コトバの謎解き:ソシユール入門』(光文社新書、2003)、『ソシユールのすべて』(研究社、2004)、『ソシユールと言語学』(講談社現代新書、2004)、セミル・パディル『イェルムスレウ:ソシユールの最大の後継者』(大修館書店、2007)、『言語世界地図』(新潮新書、2008)、『日本語の正体』(研究社、2008)、『言語構造基礎論』(勁草書房、2011)、『ロマンス語入門』(三省堂、2011)、『フランス語文法総解説』(研究社、2016)、ソシユール『新訳 一般言語学講義』(研究社、2016)。

^{やなぎさわたみお}
柳沢民雄 名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授。専門は北西カフカース語学、言語類型論、バルト・スラヴ語学。ソシユールにはじまるバルト・スラヴ語の歴史的アクセント研究を日本における草分けかつ第一人者であった故矢野通生教授より受け継ぐ。

主要業績:「古代インド語の動詞のアクセント」『名古屋大学言語学論集』5(1989)、「ロシア語のアクセント法の歴史」『ロシア語ロシア文学研究』25(1993)、「ロシア語アクセント法の史的変遷1-2」『言語文化論集』15(名古屋大学、1993-4)、『リトアニア語の基礎語彙のデータベース化の研究』(科研成果報告書、1996)、『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』(名古屋大学、2002)、*Analytic dictionary of Abkhaz*(ひつじ書房、2010)、『ヨーロッパのおもしろ言語』(町田健氏他と共著)(白水社、2010)、*A grammar of Abkhaz*(ひつじ書房、2013)、ギャルド『ロシア語文法』(ひつじ書房、2017)。

年表 Ferdinand Mongin de Saussure (1857–1913)

略歴と主要業績			関連事情
1857	0歳	11月26日、地質学者 Henri と伯爵令嬢 Louise の長男として Genève に誕生。	
1869?	12歳?	別荘で知遇を得た言語古生物学の創始者 Pictet に刺激を受け印欧語に熱中。	
1873?	15–16歳	ヘロドトスに見出した τετάχεται (τάσσω, ἔταχ- “put in order” 語根重複と気音を加えた中動・完了 3pl.) の -ατ- が他形 3pl. -vτ- に相当することから、子音に挟まれ音節核となった v = n が母音 α = a に転じると看破。すなわち Brugman に先立ち「鼻音ソナント」(nasalis sonans) の発想に到達した。	
1874?	16–17歳	習作 Essai pour réduire les mots du Grec, du Latin & de l'Allemand à un petit nombre de racines にて印欧語の語根構造について試案を作成し Pictet に送る。同時期、Bopp と Curtius [kortsius] の著作によってサンスクリットの独習と印欧祖語の母音交替についての研究を開始する。	従来 1872 年夏 (14 歳) の作とされた。1969 年に遺稿の中に発見され CFS 32 (1978) に掲載。
1875	17–18歳	秋、Genève 大学入学。物理、化学等とともに言語学を学ぶも教員 Wertheimer に不満を覚え、Leipzig への転学を検討。後に「無駄な一年間」と振り返る。	当地で唯一印欧語学を心得た私講師 Morel が前年 Curtius に受けた講義の内容を紹介。
1876	18–19歳	早春、Paris 言語学会に論文①を送り入会申請。5月13日入会が認められる。秋、Leipzig 大学入学。主任教授 Curtius と、後の青年文法学派 Leskien, Osthoff, Paul, Hübschmann, Brugman, Braune, Windisch 等の指導を受ける (～1878 夏)。Brugman に「鼻音ソナント」第一発見者の榮譽を奪われ不満を募らせる。	Curtius 留守中の紀要に Osthoff の着想に基づき Brugman が「鼻音ソナント」説を発表。若手教員、特に Osthoff と Hübschmann は Saussure の態度を不遜と受け取る。
1877	19–20歳	1月13日、Paris 言語学会で口頭発表②。Leipzig より Paris 言語学会に投稿③、④、⑤。Curtius の演習で ā と a の交替について報告。翌日 Brugman より質問あり。7月21日、Paris 言語学会で口頭発表⑥。長母音と交替する音韻 A を仮想してソナントの概念を拡張し、ā と a を含め印欧祖語の母音交替全体を解くアイデアを示す。その後、同発想を推し進め Mémoire の準備を開始。	Curtius はソナント説を拒絶。Brugman 等高弟たちと敵対関係となる。 Curtius の麾下を離れた Leskien, Osthoff, Brugman を中心として、翌年青年文法学派が旗揚げされる (以下、メンバーに⊕と表記)。
1878	20–21歳	Les origines indo-européennes ou les aryans primitifs (Pictet, Essai de paléontologie linguistique 第2版の書評)。Journal de Genève, 4月17, 19, 25日。Paris 言語学会の機関誌 MSL 3 に短評を含め6つの記事が掲載される： ① Le suffixe -t- ; ② Sur une classe de verbes lainins en -eo ; ③ La transformation latine de tt en ss suppose-t-elle un intermédiaire *-st-? ; ④ Exceptions au rhotacisme ; ⑤ i, u = es, os ; ⑥ Essai d'une distinction des différents a indo-européens。 12月、Leipzig で Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes を出版。ソナントの概念をさらに拡張して音韻 A, Q を仮想し印欧祖語の母音交替を包括的に捉える提案をなす。	⊕Osthoff が Heidelberg 大学教授に就任。 ⊕Osthoff と ⊕Brugman が MU 誌を創刊して師の Curtius に対抗。 父 Henri が Paris の Havet に Mémoire を贈る。ドイツでは Mémoire は Brugman のソナント説の亜流とみなされ正当に評価されず。
1879	21–22歳	前年暮から Berlin にて Zimmer と Oldenberg に学ぶ。Havet との往復書簡。父 Henri の意向も勘案し Paris 転学を勧められる。ソナント説と Mémoire への冷たい反応に接し、失意のうちにソナントと印欧祖語の母音交替にまつわる研究の続行を断念。ドイツ学界の狭量を憂う。サンスクリットの絶対構文に所格と並んで用いられる属格の用法を扱った手堅い論文 De l'emploi du génitif absolu en sanskrit を新たに用意。12月、Leipzig 大学に復学して博士請求。同時期、訪問したゲルマン語学者 Zarncke に「かの有名な」Mémoire の著者の親類と誤解される。	2月25日、Journal de Genève に Havet による Mémoire の高評 (新聞一面全面) が載る。 ⊕Brugman は MU2 において Mémoire を「価値ある」としながらも内容には立ち入らず。Fick が Schwa indogermanicum (ə = ソシュールの A) を想定 (Mémoire に言及なし)。 Möller が Mémoire を正当に評価・修正して E, A, O を想定。後年ラリಂಗアルと称する。
1880	22–23歳	2月、最優等 summa cum laude で博士号を受ける (主査 Curtius)。 リトアニア、Genève を経て、10月 Paris で École des Hautes Études 入学。	⊕Paul, Principien der Sprachgeschichte。
1881	23–24歳	博士論文を Genève で出版。末尾に先生方への謝辞を含む自己紹介あり。Λγαμένων。MSL 4。 10月31日、Bopp の弟子 Bréal の推挙により École des Hautes Études のゴート語・古高ドイツ語講師 (maître) に採用 (～1891)。在任中、Meillet, Ernout, Vendryes 等を育て、フランスの印欧語学のレベルを引き上げることに貢献。12月～翌年1月、Baudouin de Courtenay と交流。	⊕Osthoff が長母音と ə の交替を認めるが Mémoire に提案されたソナント拡張の想定を強引に否定。 ⊕Leskien がリトアニア語長母音の短縮化される条件を見出す。
1882	24–25歳	12月16日、Paris 言語学会副幹事に選出される。MSL の編集にも尽力。	
1883	25–26歳		⊕Brugman が Brugmann に改綴。
1884	26–27歳	MSL 5 に3編寄稿：Védique libugā – paléoslave lobūzati ; Südō ; Vieux haut-allemand murg, murgi。 Une loi rythmique de la langue grecque. Mélanges Graux。 Termes de parenté chez les aryans. Les origines du mariage et de la famille。	⊕Brugmann が Freiburg 大学教授に就任。
1885	27–28歳		⊕Hübschmann の的外れな Mémoire 批判。 Curtius 没。遺作 Zur Kritik der neuesten Sprachforschung で青年文法学派を改めて批判。
1886	28–29歳		Collitz がソナント説と Mémoire を正当に評価し、⊕Brugmann の狭量を批判して渡米。 ⊕Brugmann, Grundriß 初版 I。
1887	29–30歳	Comparatifs et superlatifs germaniques de la forme inferus, infimus. Mélanges Renier。	⊕Brugmann が Curtius 亡き後の Leipzig 大学教授に就任。
1889	31–32歳	MSL 6 に12編寄稿：Αθήν ; Lūdus ; Grec ἀλκίων, allemand Schwalbe ; Νυστάζω ; Λύθρον ; Ἰμβήρις ; Κρήνη ; Βουκόλος ; Sanscrit sīśkās ; Sur un point de la phonétique des consonnes en indo-européen ; Un ancien comparatif de sóppron ; Gotique wilwan。 健康を害し、翌年まで休職して Genève 滞任。その間、書面で Baudouin de Courtenay と Jaunius にリトアニア語アクセントについて問い合わせ。	⊕Brugmann, Grundriß 初版 II-1。

日本歴史言語学会
2017年春季公開シンポジウム「ソシュールと歴史言語学」

		略歴と主要業績	関連事情
1890	32-33 歳		ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 初版 II-2.
1891	33-34 歳	6月6日, Paris 言語学会で口頭発表: Contribution à l'histoire des aspirées sourdes . この年, Collège de France 教授に推挙されたが, スイス国籍保持のためこれを固辞して帰郷を決意. Meillet に後を託す. La légion d'honneur 叙勲. 10月, Genève 大学准教授 (professeur extraordinaire) に就任.	父 Henri の尽力により彼のためにサンスクリットと印欧語のポストが新設された.
1892	34-35 歳	3月16日, 素封家令嬢 Marie Faesch と結婚. Faesch 家よりローザンヌ近くの城 Château de Vuflens が贈られる. <i>MSL</i> 7 に 18 編寄稿: Les formes du nom de nombre «six» en indo-européen; Φρυκτός; Ληγός; Vieux prussien <i>siran</i> «le cœur»; Traitement de l'u en vieux prussien; Les féminins en -u du vieux prussien; Gothique <i>harf, háirban</i> «avoir besoin»; Ἀκείων; Τετίμηαι; Ἐπιτηδές; Περί=ὑπερ; Ἦνια; Ὀκρυόεις; Ὑγιής; X, Φ pour ks, ps; Attique -ρη- pour -ρᾱ-; -υμνο- pour -ομνο-?; Lituanien kùmsťe «le poing». 長男 Jacques (後に外交官) 誕生.	Bechtel が <i>Mémoire</i> を安易に謬見と断定. 同書はドイツで葬り去られる. ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 初版 II-3.
1893	35-36 歳	夫人と Paris 訪問. このころからめっきり寡作となり, 手紙も滞りがちとなる.	Chantre がヒッタイトの粘土板を発掘. ⓄDelbrück, <i>Grundriß</i> III.
1894	36-37 歳	1月4日, Meillet に書簡を送り, 論文執筆に専心できない気持ちを吐露. 一般的枠組み, 用語を整備する必要性とその作業の困難にも言及. 恐らくこのころ「一般言語学講義」の素案が起稿される. Sur le noninatif pluriel et le génitif singulier de la déclinaison consonantique en lituanien . <i>IF</i> 4. A propos de l'accentuation lituanienne . <i>MSL</i> 8. リトアニア語の二種類の音調の由来を突き止める. 9月, 第10回東洋語学会議(於 Genève 大学)で事務局長を務める. 同会議にて リトアニア語アクセント について口頭発表. Whitney 追悼文を依頼され, 70 頁余り起稿するが未完のままとなる. 次男 Raymond (後に医師) 誕生.	6月7日, 愛読した <i>The Life and Growth of Language</i> (1875) の著者である合衆国の言語学者 Whitney 没. 11月10日, 第一回アメリカ言語学会議.
1895	37-38 歳		Schmidt が <i>Kritik der Sonantentheorie</i> において ソナント 説を批判.
1896	38-39 歳	サンスクリットと印欧語の正教授に就任. Accentuation lituanienne . <i>IF</i> 6 <i>Anzeiger</i> . 語中の二次的長音節に置かれたアクセントが, 後続する本来的長音節(母音+ ラリソナル に由来)に規則的に移動することを突き止める(ソシュールの法則).	
1897	39-40 歳	Schmidt, <i>Kritik der Sonantentheorie</i> (書評). <i>IF</i> 7 <i>Anzeiger</i> . サマースクールで「音節理論」を講義. 受講した Bally が自身の講義録を基に出版を勧めるが承知せず.	ⓄDelbrück, <i>Grundriß</i> IV. ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 第2版 I-1,2. ついに長母音と ə (=ソシュールの A) の交替を認めるが <i>Mémoire</i> の ソナント 拡張は採らず.
1898	40-41 歳	Inscriptions phrygiennes. <i>Recherches archéologiques dans l'Asie Occidentale. Mission en Cappadoce 1893-1894</i> , par E. Chantre.	
1900	42-43 歳		ⓄDelbrück, <i>Grundriß</i> V.
1901	43-44 歳	Le nom de la ville d'Oron à l'époque romaine. <i>Journal de Genève</i> 4月7日版. 数年来俚言調査に従事するも, 11月20日スパイ容疑を受けて断念.	
1903	45-46 歳	Origine de quelques noms de lieux de la région genevoise. <i>Bulletin de la Société d'Histoire et d'Archéologie de Genève</i> , 2. このころゲルマン伝説(ニーベルンゲンの詩, トリスタン)に熱中. また, Streitberg の勧めにより回想録を起稿するが未完. 末尾でドイツ人の集団的盲信性に言及.	
1904	46-47 歳	Les Burgondes et la langue burgonde en pays roman. <i>Bulletin de la Société d'Histoire et d'Archéologie de Genève</i> , 3.	ⓄBrugmann, <i>Kurze vergleichende Grammatik</i> .
1905	47-48 歳	夫人とイタリア訪問.	父 Henri 没.
1906	48-49 歳	このころアナグラム研究に異常な情熱を燃やすが他者の理解は得られず. 夫人とイタリア訪問. 長年敬遠してきた Wertheimer の退職に伴い, 一般言語学の授業担当となる.	Winckler と Makridi が膨大なヒッタイト粘土板文書を発掘 ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 第2版 II-1.
1907	49-50 歳	第1回 一般言語学講義 (1~7月, 受講者6名)	
1908	50-51 歳	7月14日, 50歳を記念した記念論文集の贈呈祝賀会に出席. Meillet 他フランスとスイスの教え子, 友人が集まる. 第2回 一般言語学講義 (8年11月~9年6月, 受講者11名)	<i>Mélanges de linguistique offerts à M. F. de Saussure</i> . Paris: Champion. ドイツからの寄稿はない.
1909	51-52 歳	Sur les composés latins du type <i>agricola</i> . <i>Mélanges Havet</i> . 夫人と Paris 訪問.	ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 第2版 II-2-1.
1910	52-53 歳	第3回 一般言語学講義 (10年10月~11年7月受講者12名)	
1911	53-54 歳	夫人と Paris 訪問.	ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 第2版 II-2-2.
1912	54-55 歳	Adjectifs indo-européens du type <i>caecus</i> 'aveugle'. <i>Festschrift Wilhelm Thomsen</i> . 喉頭癌(?)の病状が悪化. 夏から授業を休み, Vuflens 城にて Marie 夫人の看病を受けつつ闘病. 病床では中国語研究に勤しむ.	Meillet の弟子 Cuny が <i>Mémoire</i> と Möller を見出し, E, A, O を ʔ ₁ , ʔ ₂ , ʔ ₃ と表記
1913	55 歳	2月22日, Vuflens 城にて死去. 直接の死因は心臓発作. 2月26日, 葬儀. 最後に École Pratique des Hautes Études から「天才的言語学者」の名を捧げる Havet からの弔電が紹介される.	ⓄBrugmann, <i>Grundriß</i> 第2版 III-1.

没後の Saussure (歴史言語学関係・抄)

1913	2月28日, Séchehaye が追悼講演. 10月27日, Bally が追悼講演. 師の教えを書籍化する計画を発表. Meillet の追悼文 (BSL 18).
1915	夫人 Marie de Saussure 編の追悼文集. Leipzig 大学の後輩 Streitberg による追悼記事 (<i>Indogermanisches Jahrbuch</i> 2). その後 Brugmann が Streitberg に同記事についての感想を書き送る. 彼が <i>dieser gescheite Gelehrte</i> 「この優れた学者」と呼ぶ Saussure が Leipzig に多くを負っているが, <i>Mémoire</i> 冒頭に謝辞を添えるなど, 相応の礼儀を欠いたことが反感を買ったと指摘.
1916	主に第3回講義を基に, ジュネーヴでの弟子 Bally と Séchehaye が編んだ <i>Cours de linguistique générale</i> が刊行される.
1917	Hrozny がヒッタイト文書解読に成功.
1922	Bally, Gautier 編 (Meillet 協力) 著作集 <i>Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure</i> . Paris: Payot.
1927	Meillet の弟子 Kuryłowicz が <i>a</i> indoeuropéen et <i>h</i> hittite においてラリンガルがヒッタイト語の <i>h</i> に相当すると発表.
1928	小林英夫訳『一般言語学原論』岡書院.
1931	Sapir の忠言を受けた Sturtevant が翻意してラリンガル説を採用.
1935	Kuryłowicz, <i>Études indoeuropéennes</i> I. Kraków: Polska Akademia Umiejętności. Benveniste, <i>Origines de la formation des noms en indo-européen</i> I. Paris: Adrien-Maisonneuve.
1937	Couveneur, <i>De Hettitische h : Een Bijdrage tot de Studie van het Indo-Europeesche Vocalisme</i> . Leuven.
1938	Möller の弟子 Pedersen がラリンガル説を採り H ₁ , H ₂ と表記 (ただし H ₃ は認めず). 以降 H ₁ H ₂ H ₃ の表記が半ば一般化する.
1939	高津春繁「印欧語母音変化の研究と Laryngales の発見」『言語研究』3.
1940	小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店
1941	ソシュール研究誌 <i>CFS</i> 創刊.
1942	Kuiper が音声表現も勘案して h ₁ , h ₂ , h ₃ の表記を提案. 以降, これを簡略化した h ₁ h ₂ h ₃ も徐々に用いられるようになる.
1957	第8回国際言語学学会議 (於 Oslo) でラリンガル説が主要議題のひとつとなる. Godel, <i>Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale de F. de Saussure</i> . Genève: Droz.
1959	国際会議 Evidence for Laryngeals (於 Austin, Texas) が招集される (1960, 1965 書籍化).
1963	風間喜代三「PIE. e, a, o の仮定について」『名古屋大学文学部研究論集』31.
1964	風間喜代三「最近の印欧語の <i>ə</i> の解釈について」『言語研究』45. Benveniste, F. de Saussure à l'École des Hautes Études. <i>École pratique des hautes études. 4e section, Sciences historiques et philologiques</i> .
1967	Mauro, <i>Introduzione, traduzione e commento del Corso di linguistica generale di Ferdinand de Saussure</i> . Bari: Laterza.
1968	Engler, <i>Ferdinand de Saussure. Cours de linguistique générale. Édition critique</i> . Wiesbaden: Harrassowitz.
1972	小林英夫訳『一般言語学講義』(第2版) 岩波書店.
1976	マウロ著, 山内貴美夫訳『ソシュール 一般言語学講義』校注』而立書房.
1978	散逸していたソシュール 16歳時 (1874?) の習作が Havet の <i>Mémoire</i> 評 (1879) とともに <i>CFS</i> 32 に掲載される. 月刊『言語』3月号 (大修館書店) で特集「ソシュール: 現代言語学の原点」. 風間喜代三『言語学の誕生』 岩波新書.
1980	『現代思想』10月号 (青土社) で特集「ソシュール」
1984	矢野通生「リトアニア語アクセント論覚え書き」『言語研究』87.
1985	丸山圭三郎編『ソシュール小事典』大修館書店.
1990	Paolla Villani, <i>Documenti Saussuriani conservati a Lipsia e a Berlino</i> . <i>CFS</i> 44. Brugmann, Saussure, Streitberg 間の書簡などが掲載.
1991	前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局.
1999	Boston, MA のポップグループ The Magnetic Fields が The Death Of Ferdinand De Saussure なる曲を発表. 関連不明.
2002	1996年にソシュール邸で発見された未刊草稿が刊行される: <i>Écrits de linguistique générale</i> . Paris: Gallimard.
2003	相原奈津江, 秋津伶訳『一般言語学第三回講義: エミール・コンスタンタンによる講義記録 1910-1911年』エディット・パルク.
2004	町田 健『ソシュールのすべて』研究社.
2006	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第二回講義: リードランジェ/パトワによる講義記録 1908-1909年』エディット・パルク. 神山孝夫『印欧祖語の母音組織』大学教育出版.
2007	影浦峽・田中久美子訳『第三回一般言語学講義: エミールコンスタンタンのノート』東京大学出版会.
2008	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第一回講義: リードランジェによる講義記録 1907年』エディット・パルク.
2009	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第三回講義: コンスタンタンによる講義記録+ソシュールの自筆講義メモ』エディット・パルク. Rousseau, Saussure à Paris (1880-1891). <i>Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres</i> .
2013	松澤和宏校註・訳『ソシュール一般言語学著作集 I 自筆草稿「言語の科学」』岩波書店. 菅田茂昭訳『ソシュール 一般言語学講義抄』大学書林.
2016	<i>Cours de linguistique générale</i> 100周年. 町田 健訳『新訳 一般言語学講義』研究社.

BSL: *Bulletin de la société de linguistique de Paris* (『パリ言語学会紀要』新版)

CFS: *Cahiers Ferdinand de Saussure* (『ソシュール・ノート』誌)

Grundriß: *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen* (『印欧語比較文法概説』)

IF: *Indogermanische Forschungen* (『印欧語研究』誌)

MSL: *Mémoire de la société de linguistique de Paris* (『パリ言語学会紀要』旧版)

MU: *Morphologische Untersuchungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* (『印欧語における形態論研究』誌)



Ferdinand de Saussure 尊影 3 点